

パーキンソン病について No11



話題の新薬 イブランスカプセル

抗悪性腫瘍剤

パーキンソン病の薬物治療について

抗コリン薬

① 作用

パーキンソン病では、ドパミンの不足により、アセチルコリンの作用が相対的に強くなっているため、その働きを抑えます

② 特徴

ドパミン補充療法に抵抗性の振戦に追加併用するか、若年の患者さんにL-ドパの導入を遅くさせる一つの手段として位置づけられている

③ 薬剤名

- アキネトン・タスモリン錠 1mg (ビペリデン)
1日2~3回 1日量3~6mg
- アーテン錠 2mg (トリヘキシフェニジル塩酸塩)
1日3~4回 1日量2~10mg

④ 副作用

のどが渇く、便秘・排尿障害
かすみ目、物忘れ、幻覚・妄想

L-ドパ賦活薬



① 作用

さまざまな作用機序がいられていますが、まだ十分明らかになっていません

② 特徴

L-ドパ含有製剤に他の抗パーキンソン病薬を使用しても十分に効果が得られなかった場合に使用します
ウェアリング。オフ現象を改善します

③ 薬剤名

- トレリーフ錠・OD錠 25mg (ゾニサミド)
1日1回 25mg (50mgまで増量可)

④ 副作用

眠気、食欲不振、気力低下

ファイザーは、「イブランスカプセル」を販売した。手術不能又は再発乳癌に使用される。サイクリン依存性キナーゼ (CDK) 4/6 阻害剤であり、新規作用機序の経口分子標的治療剤である。内分泌療法剤と併用する。本剤による CDK4/6 の直接的阻害に、内分泌療法剤によるエストロゲン受容体からのシグナル伝達阻害を介した CDK4/6 に対する間接的阻害が加わることにより、Rb たん白のリン酸化が協調的に阻害され、抗腫瘍効果の増強が期待される。内分泌療法剤との併用において、通常、1日1回 125mg を3週間連続して食後に経口投与し、その後1週間休薬する。これを1サイクルとして投与を繰り返す。なお、患者の状態により適宜減量する。
薬価 25mg=5576.4円 125mg=22560.3円

副作用情報 オムニパーク注

第一三共から販売されている非イオン性造影剤のオムニパーク注は、直近3年間に、急性汎発性発疹性膿疱症に関連する症例が1件報告されたため「重大な副作用」の項に「急性汎発性発疹性膿疱症」が追記された。

人は口から老いる

日本歯科医師会など歯科医療現場が、英語で「口回りの衰え」を意味する「オーラルフレイル」の予防を呼び掛け始めた。食べこぼしやむせが多く、硬い物が食べられないといった状態になると、体全体の健康状態も悪化する傾向が高いことが近年の研究で分かっていたためだ。東京大高齢社会総合研究機構は、千葉県柏市で2012年から続く高齢者の大規模健康調査で、オーラルフレイルの人はそうでない人と比べ、調査期間(4年)内に死亡した割合や要介護状態となるリスクは約2倍と明らかにした。食欲不振による栄養の偏りや筋力低下などが影響しているとされる。かかりつけ歯科医による定期健診など口腔(こうくう)ケアが重要となる。

